

城北学園同窓会 常任幹事会通信

平成十三年五月二十六日

—旧制二・三回生—

今年も六月に同期会云

稻垣 靖男（旧制三回）

今年も六月十六日（土）六時から、九段会館で同期会を開く。毎年六月の第一か第三週の土曜日、会場は九段会館と決めている。

定期的に開くようになったのは、昭和五十七年からで、今年で十八回目を数える。

戦後、中学校令が改正され、修業年限五年制度が復活して、私たちは昭和二十一年三月卒業の四年修了の旧二回生と、昭和二十二年三月卒業の五年修了の旧三回生に分かれました。そのために、同期会は卒業年度でなく、昭和十七年四月入学の同窓というくくりにしている。

毎年、五十数年前にタイムスリップして、よくしゃべり、よく飲み、よく食べて、九段会館の人たちから、お世辞かもしだれないが「皆さんは本当に七十歳を越えているのですか」といわれるほどにぎやかさ。

昨年の出席者は三十四名、百二名に案内状を発送した。

さびしいことだが、物故者が三十三名になつた。住所不明は二十一名である。

案内の返信によせられた近況や消息をあつめて「同期会報」を発行、昨年で十号となつた。

平成五年六月の同期会は、入学から数えて半世紀になるので、一泊旅行で行った。福島県高湯温泉に一泊、翌日は観光とゴルフに分かれる。現地集合の現地解散で、参加者二十八名。この一泊旅行に、仙台にお住まいの亘理悟郎先生（歴史）をお招きした。

これがきっかけになり、六月は九段会館に集まり、秋に一泊旅行をするようになる。

※ 平成八年十一月二十三日

中型バスを借り切り、龍神大吊り橋、袋田の滝をまわって、太子町ヴレッジに一泊。翌日は観光とゴルフに分かれ、夕方合流して帰京。参加者二十三名。

※ 平成十年十月十日

学園の大町山荘を利用させていただいた。朝九時に新宿西口をサロンバスで出発、東電高瀬川テプロ館、大町ダム、七倉ダムを見学して大町山荘に。

翌日は、黒部ダムの観光組とゴルフ組に分かれ、夕方、合流して新宿に帰着。参加者二十名。

平成十一年十月三日

※

山寺と天童市内観光をして、天童温泉に一泊。翌日は羽黒山と周辺をまわる。仙台にお住まいの亘理先生をお招きした。山寺の急な石段や羽黒山の山道を、身軽に登り降りされる先生のお元気さには、一同びっくり。ちなみに大正四年のお生まれで、八十六歳になられる。

現地集合、現地解散で参加者十八名。

平成十二年十月二十二日～二十五日

フィリピンのセブ島に三泊四日の旅行。同期の桜井巖雄君が定年退職してから、弟さんと一緒にセブ島でプラスチック工場を八年前に立ち上げ、経営しているので、旅行先に選んだ。

工場見学（敷地九百坪・従業員百八十名）、市内観光して、南国の海浜と島々でゆったりとした時を過ごし、新鮮な魚介料理を楽しんだ。

&スチール CO」。エジプトと日本の合弁で誕生した一貫製鉄所で、今では世界銀行が経済協力の模範的成功例に挙げている会社だ。彼は八十年代半ばの二年をその地で過ごした。その後、彼は早期退職の道を選び、家族の了解を得て、自由な空間で本を読み、できれば気のままに小さな旅ができるという生活に入る。

八年後、彼は再びエジプトの地を踏む。聖書の旅をうたい文句にするパック・ツアードラ。ある修道院への道すがら、彼はエジプト人とそれ違う。そこで交わした二言三言が、エジプトで過ごした二年の記憶を油然と蘇らせた。彼はエジプトについて書きたいと思った。

赴任していた頃の彼の最大の楽しみは、休日「ワヘッド」という運転手とともに名所旧蹟を探訪することだった。ゴルフも雀もしない彼には、ドライブが唯一の楽しみだったのだ。

もともと旅行記や探検記が好きだった。だが、史実を予習したうえでの探訪ではない。訪れた地の歴史的な意味を十分に噛みしめたのは、だから、退職後、存分に読書ができるようになってからである。読書とともに、探訪した場所の記憶が、鮮やかに蘇ってくる。

こうして出来上がったのが、この本である。基本にあらわれるのは場所の記憶。それから、その場所の歴史的意味を浮き彫りにしてくれた、さまざまの書物との出会いだ。この組み合わせが素晴らしい。出色的の読書案内もある。

（九七年五月九日号 評者 三浦雅士）

平成十三年三月二十四日（金）午後六時より、銀座東武ホテルにて同期生七十二名・先生七名を集めて、第十四回生の同期会が開催されました。早一ヶ月過ぎ、記念写真がでてきていた今日振り返ってみると、やってよかつたと心から思っております。長期にわたり非常に厳しい日常生活が続いている昨今、四十年ぶりに同期会を開こうかという思いで、こんな知的活動をされている同窓の著者に称讃したい」というタイトルの、週刊朝日の書評が目に飛び込んできた。さっそく買って読んでみた。書評通りの本だった。

定年後に、こんな知的活動をされている同窓の著者に称讃のことばを送りたい。以下は書評の一部である。

一人のサラリーマンが最後の任地に選んだのはエジプトだった。「アレキサン드리ア・ナショナル・アイロン

人生は老後こそが素晴らしい、そう思わせる本だ

卒業生の本
「アレキサン드리ア わが旅」
—砂塵と海鳴りのはざまで — 新潮社
稻垣 靖男（旧制三回）

人生は老後こそが素晴らしい、そう思わせる本だ

卒業生の本
「アレキサン드리ア わが旅」
—砂塵と海鳴りのはざまで — 新潮社
内藤幸雄著（旧制二回）

卒業四十周年 同期会を開催して
平林 義彦（十四回）

平成13年度 本校の大学入試結果

大学別合格者数

【国立大学】 119名(91) 注()内は現役数

東京大学	23(18)	一橋大学	14(13)	東京工業大学	14(12)
埼玉大学	9(7)	東北大学	5(3)	千葉大学	5(4)
電気通信大学	5(4)	東京農工大学	5(4)	横浜国立大学	5(3)
北海道大学	4(3)	京都大学	4(2)	東京学芸大学	3(3)
名古屋大学	3(3)	山形大学	2(2)	筑波大学	2(2)
宇都宮大学	2(2)	東京水産大学	2(2)	富山医科薬科大	2(1)
旭川医科大学	1	帯広畜産大学	1	群馬大学	1
東京医科歯科大	1	信州大学	1(1)	浜松医科大学	1
滋賀医科大学	1	岡山大学	1	島根大学	1(1)
香川医科大学	1(1)				

【公立大学】 22名(19)

東京都立大学	15(14)	都立科学技術大	2(2)	横浜市立大学	2(1)
岐阜はこだて未来大	1(1)	岐阜薬科大学	1(1)	九州歯科大学	1

【文部科学省管外大学校】 3名(1)

防衛医科大学校	1	防衛大学校	1	航空保安大学校	1(1)
---------	---	-------	---	---------	------

【私立大学】 769名(459)

早稲田大学	123(94)	東京理科大学	102(72)	慶應義塾大学	81(65)
明治大学	53(30)	中央大学	43(28)	日本大学	42(21)
上智大学	41(23)	立教大学	25(15)	法政大学	23(13)
芝浦工業大学	20(14)	青山学院大学	13(9)	学習院大学	12(1)
立命館大学	9(5)	駒澤大学	9(2)	東洋大学	9(2)
大東文化大学	9(1)	工学院大学	8(4)	昭和大学	8(3)
東京電機大学	8(3)	東京薬科大学	7(2)	国士館大学	6(3)
成蹊大学	6(3)	東邦大学	6(3)	専修大学	5(2)
明治学院大学	5(2)	共立薬科大学	4(2)	東京医科大学	4(2)
同志社大学	4(2)	武藏工業大学	4(1)	立正大学	4(1)
獨協大学	4	東京歯科大学	3(3)	東京農業大学	3(3)
國學院大学	3(2)	国際基督教大学	3(2)	昭和薬科大学	3(2)
東海大学	3(2)	文教大学	3(2)	星薬科大学	3(2)
武藏大学	3(2)	順天堂大学	3(1)	日本医科大学	3(1)
千葉工業大学	3(1)	立命館アジア太平洋大学	3(1)	帝京大学	3
東京経済大学	3	日本獣医畜産大	3	北里大学	2(2)
東京慈恵会医大	2(1)	関西大学	2(1)	亜細亜大学	2
成城大学	2	日本歯科大学	1(1)	産業医科大学	1(1)
麻布大学	1	神奈川大学	1	東京造形大学	1
明治薬科大学	1	和光大学	1	埼玉医科大学	1
明海大学	1	久留米大学	1	その他の大学	4(1)

平成十二年の三回目の会合で「三十名集めて実行委員会を開こう」と決めて声をかけたところ、十二名が来てくれ、その趣旨を披露しました。出席する確率は三人に一人だと考えました。我々の時代は一年九クラスで総数五百五十八名、クラス平均六十二名です。実行委員は一人五十名に声をかけなければならない計算になりますが、皆さん仕事が忙しい年代なので困難はあきらかでした。したがって、名簿作成に当たり住所不明の人は一応はずし、二百名は連絡可能であろうと判断し、その分だけハガキをだすことでも話し合いがつき、実行内容の趣旨の案内状を作つたのが平成十二年十二月のことでした。年賀ハガキで、四十年ぶりの同期会を予定していること、また、それに先駆けて学園の施設で決起大会を開きたい旨を連絡しました。

平成十三年一月二十日に決起大会を開きました。四十名位は集まってくれればと期待していましたが、当日の出席者は十四名でした。それの人々に二百枚のハガキを分けた、一人でも多く集まつてもらえるよう連絡してもらいました。開催日・費用等は多数決で決めましたが、二月十五日を締め切りとして出した案内ハガキの返事が毎日毎日気になりました。二月末までに八十一名より出席の返信があり、本心ホットしました。欠席のハガキも七十名近く来て、「今日は残念ながら出席できないが、次回は必ず出席したいので必ず連絡してほしい」というコメントがあつたりすると救われる思いでした。当日までに三回ほど会合を開き、細かい打ち合わせをやりましたが、いくつか不安な部分もありました。「出席の人が来なかつたら」とか「顔がわからんだろうか」といった心配も、当日を迎えてみると、まったくのとり越し苦労に過ぎませんでした。久しぶりの再会に皆時間のたつのを忘れて楽しく過ごすことが出来ました。皆が喜んでくれて開いて本当によかったです。

次回は六十才の記念の年に開こうということで、幹事を決めて会を開くことができたのもよかったです。そこで、今回の出席者が次回の時は強力な味方になると思います。次回は今回よりずつとうまく開催にもつていけるでしょう。これでよかつたのです。何でも最初が大変なのです。少數ながら、卒業してからも切れることなく付き合っていた、

ご寄稿のお願い

「常任幹事会通信」は、次のような原稿で紙面づくりをしてゆきます。たくさんの寄稿をお願いします。

- ・常任幹事会の報告
- ・同期会・クラス会の開催
- ・学園の現況報告やお知らせ
- ・会員の受賞、創作・研究発表
- ・体育部・同好会のO.B会の活動状況
- ・会員の近況、所感
- ・常任幹事・会員の近況、所感
- ・原稿の送り先

〒174-1871 東京都板橋区東新町二-二-八一
城北学園同窓会 広瀬正徳宛 3956-3157

何でも言える同期がいたから、何とか第一歩が開けたのだと思います。「本当に頑張った」、そして「また時間がたつてから懐かしく話したい」というのが現在の心境です。ありがとうございました。